

以てす、膚色充潔形骸好なり、至舍利弗若し衆生ありて内に智性ありて佛世尊に従うて法を聞きて信受し、慇懃に精進して速に三界を出てんと欲し自ら涅槃を求む、是を聲聞、乘と名く、彼の諸子の羊車を求むるか爲に火宅を出つるか如し、若し衆生有りて佛世尊に従うて法を聞きて信受し、慇懃に精進して自然の恵を求め、獨り善寂なるを樂うて深く諸法の因縁を知る、是を辟支佛、乘と名く、彼の諸子の鹿車を求むるか爲に火宅を出つるか如し、若し衆生ありて佛世尊に従うて法を聞きて信受し、至天人を利益し一切を度脱す、之を大乘と名く、菩薩此乘を求むる故に名て摩訶薩と爲す、彼の諸子の牛車を求むるか爲に火宅を出つるか如し、此の三車の中に今は第三の牛車を求むるか爲に火宅を出つるといふ意を取り、牛に憂を添へ、おもひの家に火宅を含めたるなり、蓋し世の憂事の道に入る因縁となるは常の事にて、千載集寂蓮法師の歌に、世の中のうきは今こそ歸しけれ思ひしらすはいとほしや、はとよまれたるも此意なりかし。

(6) ころすぐすは業盡くすにて、惡業の報ひを此にて贖ひ盡くすといふ法の浮木は第一

こころつくす御手洗川の龜なれば法の浮木にあはぬなりけり(傳)

項を見よ。

(7) いつしかさ君にと思ひし若菜をは法の道にうけふは摘つる(傳)

法の爲に若菜つむ意は大王が阿私仙人に仕ふる意なり、下の十四項を見よ。

(8) 爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍りて又の日これかれもろこ

もにかへり侍りにけるついでに小野にまかりて侍りけるに

花のおもしろかりければ 春宮大夫道綱母

薪こる事は昨日につきにしをいさをのゝははこゝに朽さん(傳)

經供養とは新に寫せる法華經を供養する法會にて此法會には薪の行道(下の十四項に委し)ありたるなれば上の句に之をよめるなり、下の句は王質の仙翁の非を見て斧の柄くち

たる故事を引き、今日の花のおもしろさに斧の柄の朽るまても此にありたしと也。

(9) 今日よりは露の命も惜からずはちすのうへの玉ごちされば(傳)

〔觀無量壽經〕に淨土に往生する人は彼の土の七寶池の中の蓮華の中に生ずることを説けり、行者自見坐紫金臺、合掌叉手讚嘆諸佛、如一念頃即生彼國七寶池中、此紫金臺、如大寶華、經宿則開、といひ又は、如一念頃、即得往生極樂世界、於蓮華中、滿十二大劫、蓮華方

開といふ是れなり。

(10) くらきより冥き道にう入ぬへきはるかにてらせ山の端の月(傳)

此は法華經化城喻品に衆生常苦惱盲冥無導師不知求解脫長夜增惡趣減損諸天衆從冥入於冥永不聞佛名といふに依る。又佛說無量壽經下に善人行善從樂入樂從明入明惡人行惡從苦入苦從冥入冥といへり。同じ意なり。愚人は冥味の心より冥味の業を造り冥味の苦を受くるといふ。

(11) 極樂ははるけき程さきしかご勉めていたるところ也けり(傳)

佛說阿彌陀經に從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂其土有佛號阿彌陀とあれは極樂ははるけき程といふ然るに佛說觀無量壽經に阿彌陀佛去此不遠乃欲生彼國者皆修三福一者孝養父母奉事師長慈心不殺修十善業二者受持三皈具足衆戒不犯威儀三者發菩提心深信因果讀誦大乘勸進行者如此三事名爲淨業とあれは勉めていたるところといふ。

(12) 一たびも南無阿彌陀佛といふ人の蓮の上へのほらぬはなし(傳)

法華經方便品に一稱南無佛皆已成佛道云善導の往生禮讚に無量壽經云若我成佛十

方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺云南無阿彌陀佛の解は前に出づ。

(13) 三十ちあまりふたつのすかたうなへたる昔の人の踏る跡うこれ(傳)

三十ちあまりふたつのすかたとは三十二相なり佛の三十二相の事前に詳釋せり。

(14) 法華經をわかえし事は薪こり菜つみ水くみつかへてう得し(傳)

此は法華經第五卷提婆品に釋迦如來往昔國王たりし時に阿私と名くる仙人に給仕して法華經を聽聞せしといふ故事に依りてよめるなり。經の文に爾時佛告諸菩薩及天人四衆吾於過去無量劫中求法華經無有懈倦乃爲於法故捐捨國位委政太子擊鼓宣令四方求法誰能爲我說大乘者吾當終身供給走使時有仙人來自王言我有大乘名妙法蓮華經若不違我當爲宣說王聞仙言歡喜踊躍即隨仙人供給所須採菜汲水捨薪設食乃至以身而爲床座身心無倦于時奉事經於千載爲於法故精勤給侍令無所乏上又下の偈文に時有阿私仙來自於大王我有微妙法世間所希有若能修行者吾當爲汝說時王聞仙言心生大喜悅即便隨仙人供給於所須採薪及果飢隨時恭敬與情存妙法故身心無懈倦上已されはわかとは釋迦如來なり。さて此歌を薪こりの歌と稱へて法華八講の第三日即ち五卷の日には此歌をうたうて行道をなす事古例とはなれるなり。

(15) 百草にやろくさうへて給ひてし乳房のむくひけふろわれする(後)

百草にやそくさうへてとは心地觀經に幼稚之時所飲母乳百八十石といふに依る。けふろわれするとは出家入道せし時をいふ。是れ眞實の報恩となりぬればなり。清信士度人經の偈に「流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無爲眞實報恩者」

南天竺より東大寺供養にあひに菩提かなきさにきつきたり
ける時よめる
大僧正行基

靈山の釋迦のみまへに契りてし眞如くちせすあひみつる哉

かへし
婆羅門僧正

かひらるゝに共に契りしかひありて文殊の御顔あひ見つるかな(後)
東大寺供養とは孝謙天皇天平勝寶四年四月九日開眼供養之あり。導師は梵僧婆羅門僧正。呪願は行基大僧正。講師は隆尊。讚師は延福なり。塵點燼盡鈔に出つ。菩提とは婆羅門僧正の名なり。元亨釋書十五菩提傳に天平八年七月行基法師奏して曰く。當に聖僧を迎ふへしと。聖武帝禮部鴻臚雅樂の三僚に詔して難波の津に向ふ。基一百の沙門を率て官僚と共に海濱に於て音樂を調へ儀仗を裝うて之を待つ。須臾にして西海の波

面に小舟泛々として漸く近し。二りの梵僧あり。基迎へ笑ふ。提の手を執りて共に語る。奮議の如し。始は梵言。基能く應ず。後は和語。提能く和す。甚た款密なり。云されは此時の歌なるへし。○靈山とは靈鷲山の事。天竺の摩竭陀國に在て釋尊が法華を説きし山也。○眞如とは證るへき理。鉢の名なり。前に詳釋せり。○みづるとは見つるに満つるを兼ねたり。眞如には一切の萬徳をみてればなり。○かひらるゝとは釋尊の生國迦毘羅衛城なり。○文殊とは法華經の序品にて彌勒と問答せし文殊菩薩なり。此歌にて行基は文殊の化身なることを知るなり。さては婆羅門僧正は普賢菩薩の化現なりと。燼盡鈔に記しける。○婆羅門僧正とは婆羅門の姿をなせばなり。天平勝寶三年僧正となる。時の人婆羅門僧正と號すといふ事(本傳)に出つ。
(拾遺集終)

十國二種學 佛語解釋終

○再考

(1) 題名僧(三)

法會の時に經の題名を讀み揚ぐる人なり(修善雜記上)

(2) 無量百千劫 淨修身口意 如此施獲得 如此微妙力(三)

〔付法藏傳三〕に愛波迦多伽魔の變現せる佛の形相を觀て讚嘆せし偈に

面如紫金色 目淨如青蓮 端正超日月 奇妙勝花林 湛然若大海 不動如須彌
安步猶師子 願視同牛王 無量百千劫 淨修身口意 以是故獲得 如此殊妙身
怨見尙歡喜 況我不欣慶

(3) 持地菩薩の構へ給へりげん金銀水精のみつの階に劣らす(三)

此は嗟峨の釋迦如來の緣起に依りし者にて康賴の(寶物集二)に引けり佛切利天より
一夏九旬果て祇園精舎へ皈り給ひし時持地菩薩の金銀水精の三の橋を渡り給ひし
に栴檀の佛も橋の本まで參り給へり云

(4) 諸行無常は天上にのほる智慧のはしなり。是生滅法は愛欲の河を

渡る般若の船なり。生滅滅已は劍の山を越ゆる寶車なり。寂滅爲樂

は淨土に參る八相成道の義果なり(二三四)

〔寶物集二に諸行無常は天に上る階、是生滅法は愛欲の海を渡る船、生滅滅已は劍の山を越る車、寂滅爲樂は八相成道の證果なり。〕

(5) 滅罪生善往生極樂(二五九)
〔寶物集一に西の局に入りて南無大恩教主釋迦牟尼無上大覺世尊滅罪生善臨終正念往生極樂と伏し拜みて〕

(6) 唐の台州刺史陸淳(三三八)
〔註釋に陸は陸の誤とせしは反て謬なり更に叙山の本書を檢するに陸淳とあり〕

(7) 釋尊昔阿難を伴ひておはしけるに人金をおとしけり阿難これを
見て毒蛇とのたまふ(四五六)

〔寶物集一に又或説に佛阿難を具して道を御座しけるに草むらの中に穴あり穴の中に金あり佛是を見給ひて毒蛇と仰せらる阿難是を悟りて大毒蛇といへり傍なる人は是を見るに蛇はなくして金ありければ喜ひて取りぬ公家は是を聞召て金を召すに有

限り献りつ猶も此残りあらんとて責を蒙りて悲める時毒蛇と宣ふを思ひ合せける事なり。

明治三十四年五月廿八日印刷
明治三十四年六月十一日發行



著者

東京府士族

織田 得能

發行者

平本 正次

印刷者

松本 秋齋

發行所

光融

東京市神田區駿河臺
西紅梅町十番地



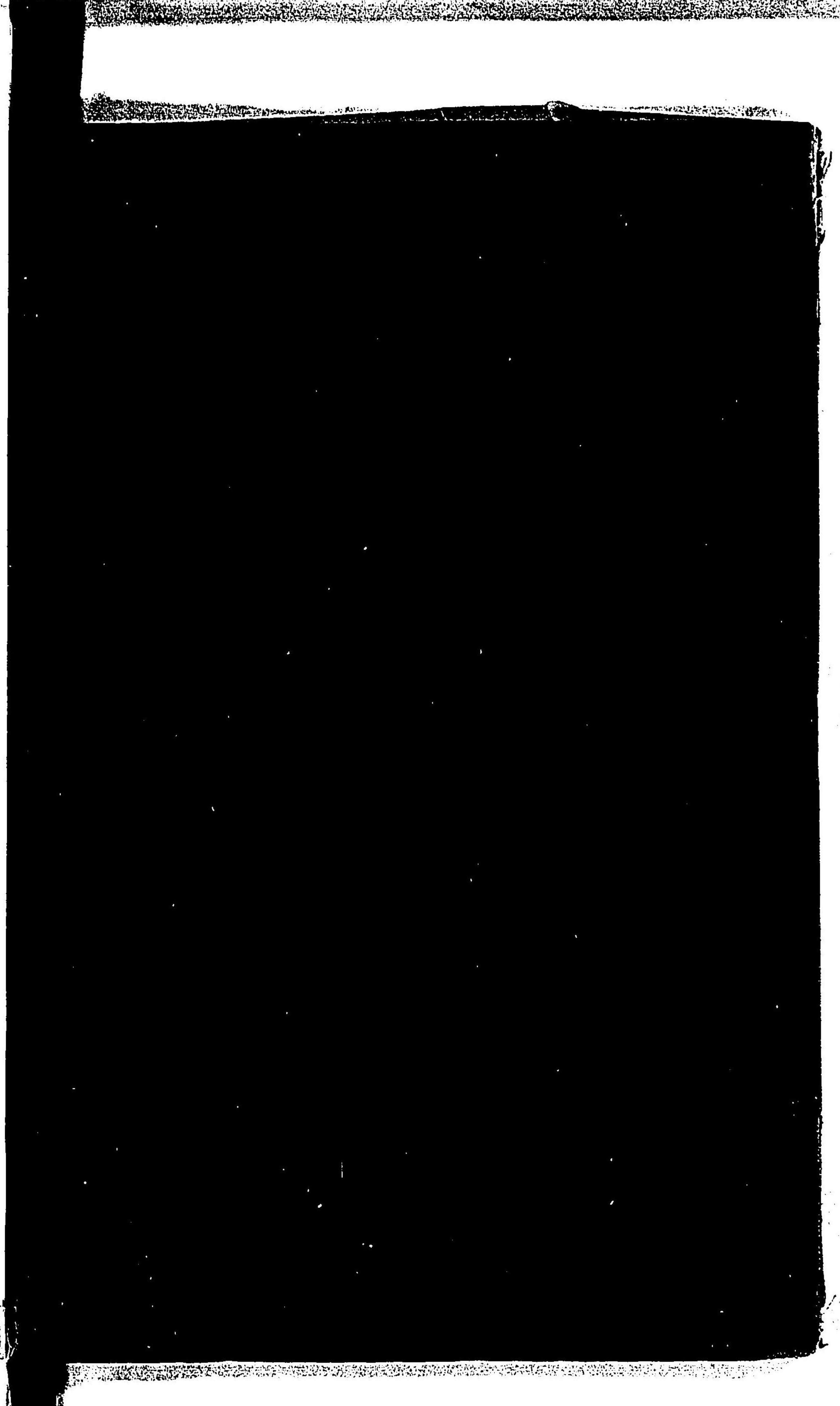
佛語解釋與附

定價 壹圓五拾錢

9/1
5

大 賣 捌 所

東京神田表神保町	同 同 裏神保町	同 京橋區榎屋町	同 同	同 麻布區飯倉	同 芝區露月町	同 本郷元富士町	同 同	同 牛込神樂坂	同 京橋區銀座	東京神田一ツ橋通	同 淺草區廣小路	京都木屋町二條	同 五條通高倉	同 油小路北小路上	同 東六條	
東京堂	上田屋	東海合資會社	北隆館	森江書店	鴻盟社	田中書店	盛春堂	盛文堂	服部書店	有斐閣	淺倉屋	貝葉書院	西村十治郎	興教書院	法藏館	
同 油小路花屋町	同 三條高倉	大坂南本町四丁目	同 備后町	名古屋門前町	同 末廣町	金澤片町	越中高岡	越前福井	同 同	美濃岐阜	筑前博多	豊後大分	熊本新町	越後長岡	越中富山	信濃長野市大門町
顯道書院	出雲寺書店	金尾書店	吉岡平助	其中堂	文光堂	宇都宮源平	學海堂	品川太左衛門	酒井安兵衛	郁文堂	積善館支店	甲斐治平	長崎次郎	目黒十郎	中田書店	西澤喜太郎





084980-000-8

91-5

仏語解釈

織田 得能/著

M34

DBB-0397

